

『大和物語』一四六段異文考：「あさみどり」と 「ふかみどり」と

小松, 明日佳
九州大学大学院：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1448716>

出版情報：語文研究. 115, pp.17-29, 2013-06-07. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『大和物語』 一四六段異文考

— 「あさみどり」と「ふかみどり」と —

小 松 明日佳

はじめに

『大和物語』一四六段は、宇多帝が鳥飼の離宮で大江玉淵の娘を名乗るうかれめに会おう話である。宇多帝は、そのうかれめが大江玉淵の娘であるか否かを確かめるために、「鳥飼」を題にした歌を詠ませる。すると、うかれめは即座に歌を詠み、その出来映えに、宇多帝は感動して涙するのである。その本文は、『新編日本古典文学全集』によれば、以下のようである。

亭子の帝、鳥飼院におはしましたにけり。例のごと、御遊びあり。「このわたりのうかれめども、あまたまゐりてさ

ぶらふなかに、声おもしろく、よしあるものは侍りや」と問はせたまふに、うかれめばらの申すやう、「大江の玉淵がむすめと申す者、めづらしうまゐりて侍り」と申しければ、見せたまふに、さまかたちも清けなりければ、あはれがりたまうて、うへに召しあげたまふ。「そもそもまことか」など問はせたまふに、鳥飼といふ題を、みなみな人々によませたまひにけり。おほせたまふやう、「玉淵はいとらうありて、歌などよくよみき。この鳥飼といふ題をよくつかうまつりたらむにしたがひて、まことの子とおもほさむ」とおほせたまひけり。うけたまはりて、すなはち、

あさみどりかひある春にあひぬればかすみならねど
たちのぼりけり

とよむ時に、帝、ののしりあはれがりたまひて、御しほ
たれたまふ。(以下、省略) (三六六—三六七頁)

ここであかれめが詠んだ「あさみどり」の歌は、現行の各種注釈書においてもこの通りで、そこに違いはない。しかし、この歌にはその実、本文の異同が存在している。このことは、阿部俊子氏の『校本大和物語とその研究』(三省堂・一九五四年)や高橋正治氏の『大和物語の研究』(啓文堂・一九七〇年)において既に指摘されていることでもある。すなわち、二条家本系統とされる多くの諸本に対立するかたちで、大きな異同をもつ六条家本系統の少数の伝本があり、そこにおいては、歌の表現に違いがみられるのだ。九州大学附属図書館蔵支子文庫本『大和物語』によれば、次のようになってい

ふかみとりかひあるはるにあふときはかすみならねとた
ちのほりけり (一五丁表)

異同は初句と三句とにみられ、特に初句の異同は歌意にも関わり、看過しがたいものがある。しかし、このような異同があることについて具体的に検討したものは、従来、柿本獎氏の『大和物語の注釈と研究』(武蔵野書院・一九八一年)が

あるのみである。そこでは、同じ話が『大鏡』にみえることを指摘の上、次のように論じている。

〔『大鏡』を『大和物語』と比べると―筆者注〕 歌曲一句の異伝のほかは本段と変る所は無い。(中略) ただ、「ふかみどり」は、

深緑染めけむ松のえにし(枝にし・縁) あらば薄き袖にも波は寄せてむ(『後撰集』恋歌五・九三二)

深緑常緑の松の陰にゐて移ろふ花をよそこにこそ見れ(同・春上・四二)

海にのみ浸ぢたる松の深緑幾しほ(入・潮) とかは知るべかるらむ(『拾遺集』雑上・四五七。『伊勢集』にも)

三島江の岸にひまなき深緑君がみゆきをまつ(待・松) にぞありける(『栄花物語』松のしづえ)

のように常緑の松について言うのが目立ち、「春」には「浅緑」を優るとしてよいのではあるまいか。(三七七頁)

柿本氏は、和歌での用例を吟味した上で、春を詠んだうかれめの歌には、「あさみどり」とあるのが妥当である、と結論付けている。しかしながら、「ふかみどり」という異文が厳然

と存在することに加え、後述するように、この段と同じ内容を記した後世の作品でも、歌の初句は「ふかみどり」となっている。そこで、本稿では、異文「ふかみどり」を一概に排除するのではなく、そのように表現することの意義について、改めて考え直してみたい。

以下、本文の引用は、特に断らない限り、和歌に関しては『新編国歌大観』に、その他の作品に関しては『新編日本古典文学全集』による。

一、「あさみどり」の歌の本文異同と別出作品

『大和物語』の諸本間での「あさみどり」の歌の異同については、前述の通りである。そして、注釈書類においては、活字化の際に使用した底本に違いはあっても、「あさみどりかひある春にあひぬれば」とする本文が、現在では広く流通している。その一方で、御巫本・鈴鹿本・勝命本・支子文庫本といった、所謂異本系の本文では、「ふかみどりかひあるはるにあふときは」とある。このことは、注釈書類において、校異として触れられることはあっても、それ以上に検討がなされることは皆無であった。先の柿本氏の検討も、『大和物語』の本文の異同についてというより、後続の『大鏡』にみられ

る本文との優劣についてのものである。

「あさみどり」の歌が『大鏡』にも存在し、そこでの初句が異なることは、北村季吟が『大和物語抄』において、「大鏡には、ふかみどりと侍り」と指摘するものであった。近代の注釈書では、初句が異なるためか、かえって別出への言及・指摘のなされることが多い。いま、『大鏡』他の別出作品を列挙すれば、以下の通りである。

また、鳥飼院におはしましたるに、例の遊女あそびどもあまた
まありたる中に、大江玉淵が女の、声よく容貌かたちをかしげ
なれば、あはれがらせたまひて、上に召しあげて、「玉淵
はいと労ありて、歌などよく詠みき。この『鳥飼』とい
ふ題を、人々の詠むに、同じ心につかうまつりたらば、
まことの玉淵が子とは思し召さむ」と仰せたまふをうけ
たまはりて、すなはち、

ふかみどりかひある春にあふ時は霞ならねど立ちの
ほりけり」

など、めでたがりて、帝よりはじめたてまつりて、もの
かづけたまふほどのこと、南院の七郎君にうしろむべき
ことなど仰せられけるほどなど、くはしくぞ語る。(『大
鏡』「道長(雑々物語)」・四一三―四一四頁)

(上略)亭子の帝、鳥養院にて、御遊びありけるに、「とりかひ」といふことを、人々よませられけるに、遊女、傀儡、あまた参り集まれり。そのなかに、歌よくうたひて、声よきものをとほるるに、「丹波守玉淵が女に、白女」と申せり。帝、御舟に召し乗せて、玉淵は詩歌にたくみなりしものなり。その女ならば、この歌をよむべし。さらば、まこととおぼしめすべき由を仰せらるるほどもなく、よめり。

深みどりかひある春にあふ時は霞ならねど立ちのほりけり

この時、帝、ほめあはれみ給ひて、御桂一重をたまはせけり。そのほか上達部、四位、おのおの衣ぬぎてかけければ、二間はかりに積みあまりにけりとなむ。(『十訓抄』第十「才芸を庶幾すべき事」五十一・四四〇—四四一頁)

亭子院、鳥養院にて御遊ありけるに、とりかひといふことを、人々よませられけるに、あそびあまたまいりあつまれる、其中に、歌よくうたひて、こゑよきもの、ありけるをとほる、に、「丹後守玉淵がむすめ白女」となん申けり。御門、御船めしよせて、玉淵は詩歌にたくみなりしものなり、其女ならば此歌よむべし、さらばまこ

ととおぼしめすべき由仰らるゝに、程へずよみける、

ふかみどりかひある春にあふときは霞ならねど立のほりけり

御門ほめあはれみ給て、御うちぎ一重をたまはせけり。其外、上達部・殿上人、をの／＼きぬ、ぎてかづけられければ、二間はかりにつきあまりけるとなむ。(『日本古典文学大系 古今著聞集』和歌第六・一九九話・一七七頁)

『大和物語』に依拠したと考えられるこれらの作品では、歌の上句が、すべて「ふかみどりかひある春にあふときは」となっている。このことは、これらが、二条家本系統の『大和物語』ではなく、異本系統によつたものである可能性を示唆するが、同時に、「ふかみどり」と表現することが、これらの作品では不審とされていないことを表している。そのため、柿本氏による検討結果を尊重しつつも、それとは別に、「ふかみどり」と表現することの意義についても、再検討する必要があると考えられるのである。

二、和歌における「あさみどり」と「ふかみどり」

「あさみどり」と「ふかみどり」は、緑という色の深淺をいう、いわば対義語であるが、たとえば『歌ことは歌枕大辞典』（角川書店・一九九九年）での見出し語となっているか否かということで見ると、「あさみどり」が立項・解説されている一方で、「ふかみどり」は立項されていないといった違いがある。実際に、和歌における用例にも、多寡がある。そこで、ここでは和歌における両者の詠まれ方を、『大和物語』所載の「あさみどり」の歌との比較を念頭に置いて、概観する。

「あさみどり」の語は、柿本氏が「春」には「浅緑」を優るとしてよい」と説かれた通り、春の歌、特にその情景を詠むときに詠み込まれることが多い。「春」や「霞」の語とともに詠み込まれることも少なくなく、その点では、二条家本系統『大和物語』の歌が「あさみどり」とあることは、和歌として自然であるといえる。

「あさみどり」を詠み込んだ代表的な歌といえば、以下の歌が挙げられるだろう。

あさみどりいとよりかけてしらつゆをたまにもぬける春

の柳か（『古今和歌集』巻第一・春歌上・西大寺のほとりの柳をよめる・僧正遍昭・二七）

「春」の「柳」とともに詠んだ例としては、古く、

浅緑アサミドリ 染懸ソメカケタリト有跡ミルマデニ 見左右二ハルノヤサギハ 春楊者モエニルカモ 日生来鴨ニ（『万葉集』巻第十・春雑歌・詠柳・一八五二）

があり、『古今和歌集』以後も、

あさみどりみだれてなびくあをやぎのいろにぞはるのか
ぜもみえける（『後拾遺和歌集』第一・春上・だいしらず・藤原元真・七六）

ふるさとのみかきのやなぎはるばるとたがかけそめしあ
さみどりぞも（『金葉和歌集』三奏本第一・春・故郷城柳をよめる・源道濟・三二）、『詞花和歌集』巻第一・故郷柳をよめる・源道濟・一六）

などがある。

また、「野辺の霞」とともに用いられた例もみられる。

浅緑のべの霞はつつめどもこぼれてにほふ花ざくらかな
〔『拾遺和歌集』巻第一・春・菅家万葉集の中・四〇〕

あさみどりのべのかすみのたなびくにけふのこ松をまかせつるかな〔『後拾遺和歌集』第一・春上・だいしらず・民部卿経信・三〇〕

若なつむ我を人見は浅みどり野への霞とたちかくれなん
〔『古今和歌六帖』第一・わかな・つらゆき・四八〕

総じて「あさみどり」は、草木が色付き始めた早春の色を表すことが多く、季節が冬から春へと移行する様子や、春が深まっていく様子を詠む場合もある。たとえば、

春はきてきのふばかりをあさみどりいろは今朝こく野は成りにけり〔『古今和歌六帖』第六・さこく・詠み人不知・三九一三〕

では、早春の「あさみどり」の野が、翌朝には色濃くなったとする。そして、

あさみどりむらみえしわかくさの春とともにぞふかくなりゆく〔『六条斎院歌合（天喜四年閏三月）・若草左・左衛門・一一〕

では、「あさみどり」の若草が、春の深まりとともに色深く繁茂してきたとしている。

また、「あさみどり」は、その後色濃くなっていくことから、これからも続いていくものの始まりや、色が定まらないことから、不定であることを詠むことがある。これらは、春という季節を直接に詠んだ歌とは、少々趣が異なっている。

あさみどりみかみのやまのはるがすみたつやちとせのはじめなるらん〔『江帥集』・雑部・（鳥羽院大嘗会悠紀方）歌）甲帖正二月 三神山春霞立渡・四九六〕

子日する小松が原の浅みどり霞に千代のかげぞこもれる
〔『御室五十首』・春十二首・藤原有家・四五二〕

これらはいずれも、早春の「あさみどり」を起点として、遙かな未来を予祝する賀の歌となっている。

あさみどりふかくもあらぬ青柳は色かはらじといかがた
のまん（『新古今和歌集』巻第十四・恋歌四・（後朱雀院
御歌「青柳のいとはかたがたなびくともおもひそめてむ
色ぞかはらじ」に対する）御返し・女御生子・一二五三）

ここでは、「あさみどり」の柳がいずれ色変わりするのに擬えて、男の愛情の不変は期待出来ないとしている。

以上のように、「あさみどり」は早春の色であり、春の深まりとともにその色も深まることから、今後変化していくことが共通認識として基底にあるといえるだろう。

一方「ふかみどり」は、「あさみどり」とは用法が異なり、柿本氏の指摘にもあるように、「松」とともに詠まれることが多い。そして、その「松」は、以下の例のように、長年色を変えないものとして詠まれる。

ふか緑ときはの松の影にゐてうつろふ花をよそにこそ見
れ（『後撰和歌集』巻第一・春上・松のもとにこれかれ侍
りて花をみやりて・坂上是則・四二※柿本氏によって指
摘済み）

海にのみひちたる松のふかみどりいくしほとかはしるべ

かるらん（『拾遺和歌集』巻第八・雑上・五条の内侍のか
みの賀の屏風に、松のうみにひたりたる所を・伊勢・四
五七※柿本氏によって指摘済み）

老いにけるなぎさの松のふかみどりしづめるかけをよそ
にやはみる（『新古今和歌集』巻第十八・雑歌下・なぎさ
の松といふ事をよみ侍りける・順・一七〇九）

こうした「松」の不変性から派生して、帝の治世が長く続くことを願う歌に詠み込まれることもある。

君が代のちとせのまつのまつのふかみどりさわがぬ水にかけは
みえつつ（『長能集』・（ひととせ、おほととの冊講の歌合
に）池辺松・七五）

このように、不変である「松」とともに詠まれることの多い「ふかみどり」であるが、季節感を伴わないわけではない。ただし、「あさみどり」が早春の歌に多用されるのに対して、「ふかみどり」は春の深まりを意識した歌にいくらかみられる程度である。

ふかみどりはやまのいろをおすまでにふぢのむらごはさ
きみちにけり（『惠慶法師集』・春・二二五）

冬草とみえし春のの小篠原やよひの雨に深みどりなる
（『堀河百首』・春廿首・仲実・一六七）

春雨のふりそめしより野べみればふか緑にも成りにける
かな（『和歌一字抄』上・雨中野草・無名・二〇〇）

以上、「あさみどり」と「ふかみどり」の用法について概観してきたが、『大和物語』の歌としては、「あさみどり」の方が「春」や「霞」との親和性も強く、春の情景を詠むこの歌にはふさわしい表現であるといえる。その一方で、「ふかみどり」の場合も、より深まった春を詠んだものとして捉えれば、特に不都合だとはいえない。しかし、春の歌としては、柿本氏の検討結果を追認することとなるが、「あさみどり」とある方が自然であるといえる。

三、歌が詠まれる場

しかしながら、うかれめの詠んだ「あさみどり」の歌は、

単に春の情景を詠んだものではない。ここで、少し視点を変えて、歌の詠まれた「場」について考えてみる。その手掛かりとして、唐突ではあるが、『伊勢物語』九七段での歌のありようについて論じた、渡辺実氏の『新潮日本古典集成 伊勢物語』「解説・在原業平——伊勢物語の素材」（新潮社・一九七六年）を参照する。長文ではあるが、以下に引用する。

もとより時の権力者たる良房や基経に対して、面と抗うことなど勿論あり得ないにしても、かつて高子への恋を裂き、その高子など一門の娘を利用して、王族を押しつけ競争者を倒して、強引に地歩を固めて行く藤原氏への反撥は、やむを得ずしてとる随従の裏で、ますます強くなつていつて当然である。そしてそのような複雑な感情は、時に甚だきわどい歌となつて人をおどろかせた。

むかし、堀河のおほいまうちぎみと申す、いまそかりけり。四十の賀、九條の家にてせられける日、中将なりける翁、

さくら花散り交ひ曇れ老いらくの来むといふなる道まがふがに

これは『伊勢物語』九十七段で、「堀河の大臣」とは藤原基経の称。「中将なりける翁」が業平であることは、これ

が『古今集』に、在原業平朝臣の作として載る（行平作とする伝本もあるが）ところから、まず疑いはないであろう。この歌は『古今』も「賀」の部に収めるごとく、業平が権力者基経に、その四十賀の宴席で奉った祝賀歌である、と単純に見なされており、業平が必ずしも藤原氏に対して含むところがなかったに見える例だが、およそそのような単純な祝賀歌ではなく、甚だきわどい歌であつたかと思われる。

基経の四十賀は、多数の賓客を招いて行われていたであろう。その祝賀の宴席で、人々の祝賀の歌が、一首また一首と披露され、業平のこの歌に及んだ時、人々は一瞬愕然となった、のではなかつたか。当時の歌の披露は、一句一句ゆつくりと、特に上の句の終りでは、大きく息を休める形でなされていたであろう。

さくらばな ちりかひくもれ おいらくの――

初句に問題はないけれども、第二句の「散り……曇れ」は、不吉な句いを漂わせた言葉である。四十歳を境として、以後を老人と考えるのが当時の習いであるが、だからこそ賀ではめでたい言葉ばかりを使うのが礼法である中で、これは賀の言葉としては異様ではなかつたらうか。まして第三句「老いらく」は、こんな場合タブーと

すべき言葉ではないか。「散れ――曇れ――老いらく」、この不吉な言葉を連ねて、業平はいつたい権力者に向つて何を言おうとするのか。業平と藤原氏のことを知っている一同は、基経の顔色をうかがいつつ、事の先行きにかたずをのむ思いであつたに違いない。

こむといふなる みちまがふがに

だが下の句は、人々の動揺をよそに、賀の歌としておさまってしまった。公の席で、立派に賀の歌として通るものになつてしまった。基経も平静を装うしかない。心中ひそかに快哉を以て応ずる人もいたことであろう。このあたりが業平のなし得るぎりぎりの線だとは言え、これはきわどい祝賀歌であつた。『古今集』がこれを「賀」に採つたのは当然のことながら、すでに亡き業平の満足するところであつたらう。（二七九―一八一頁）

ここで業平が詠んだ歌は、文字にして見れば祝賀の歌とすぐにわかるものではある。しかし、実際の場では、歌は詠み上げによつて享受される。そのため、上の句を詠み上げた時点で、業平の歌が祝賀の歌に収まるかどうかはわからぬ。そうした動揺も折り込み済みで、業平はこの歌を詠んだというのである。ここでは、歌が詠まれる場が、歌の理解に

において重要であることが示されている。

以上のことを参考に、歌が詠まれる場という視点を「あさみどり」の歌に適用してみるとどうなるだろうか。

改めてこの歌が詠まれた状況を確認する。この歌は、宇多帝の命を受け、自らが大江玉淵の娘であることを証明するために、「とりかひ」を題にしてうかれめが詠んだものである。その課題は、初句と二句とをまたぐ形で「とりかひ」が詠み込まれることで達成されている。そして歌の内容は、春の情景を詠み込みながら、帝に召し上げられた光栄を表現したものであった。さらにこの歌は、帝の御前で詠み上げることを前提に作られている。帝を含めたその場の人々は、うかれめが、召し上げた帝の厚意に報いるような出来映えの歌を詠むことを期待している。そのような中で「あさみどり」の歌は詠まれ、帝は感激するのである。この歌が詠まれた状況は以上のようにあり、歌が詠まれる場に焦点を当てた場合、「あさみどり」と「ふかみどり」とでは、どのような違いが生じるであろうか。

うかれめが「あさみどり」と詠み上げたとき、人々の耳にはまず、「あさ…」という音が聞こえてくる。「あさ…」は「浅…」であり、浅はか、浅ましいなどの語を形成する、程度の低さを表す語である。帝の厚意に報いる歌を期待している

人々の耳に最初に入ってくるのが、このような「あさ…」という音なのである。このことは、前引の業平の歌ほどではないにせよ、あまり歓迎される詠い出しとはいえないのではないか。春の歌を詠むということでは、表現として何ら問題は無い。しかし、帝の厚意に報いるという意図からすると、「あさ…」という音が真つ先に聞こえてくることは、少々不都合であるといえよう。うかれめに業平のような底意があったとは考え難い。そのため、意識的にきわどい表現を用いたとは考えられない。文字にすれば、よく出来た春の歌である。しかし、詠み上げによつて享受される場においては、不都合が生じる可能性を否定出来ないのである。

一方、「ふかみどり」と詠み上げた場合はどうであろうか。人々の耳にはまず「ふか…」という音が聞こえてくる。これは、「あさ…」とは正反対の効果をもたらすものである。「ふか(深)…」は、「あさ(浅)…」とは対照的に、程度の高さを表す語である。人々はどうかれめが帝の厚意に報いるような歌を詠むことを期待している。そのため、このような詠い出しは歓迎されることであろう。あえて「ふかみどり」とすることには、この歌を単なる春の歌として詠み上げること以上に、歌を献上する相手としての帝の存在が意識されているのではないだろうか。

また、「ふかみどり」は、前述したように、不変や長く続いていくことを表す際に用いられる語である。そのため、ここで用いることで、帝の治世が長く続くことを願う気持ちを含ませることが出来る。これが「あさみどり」の場合、そこから始まることを明示しない限り、長く続いていくことを表すのは難しい。そのため、「ふかみどり」のように、帝の治世が長く続くことを願うという意味を含ませることが出来ないのである。

このようにこの歌が詠まれた場を理解していくと、「ふかみどり」と詠い出すことは、人々の期待に対して、十二分に応えるものであったと考えられるだろう。文字にされた状態で一首として享受するのではなく、詠み上げによって一句一句が享受されるという状況を想定することで、これまでとは違った読みの可能性が立ち上がってくるのである。

四、和歌表現の定型とずらし

『大和物語』が成立した頃の「あさみどり」と「ふかみどり」の和歌での詠まれ方を比較すれば、『大和物語』の歌としては、やはり「あさみどり」と詠む方が自然であると考えられる。先述したところではあるが、その頃の「ふかみどり」

は、ほとんど「松」とともに詠まれ、春の歌として詠まれることはあっても、「花」や「藤」との対比によってであり、その歌の中心を占めて季節を表すものではない。そのため、初句が「ふかみどり」であった場合、初句から春の歌であることを感得することは難しい。「ふかみどり」と詠み始めることは、一般的な詠み方からすると、やはり変則的なものといわざるを得ない。一方、「あさみどり」と詠い出した場合、初句が春の歌として一首を領導するものになるため、そうした自然はなく、型通りの詠み方であるといえるのである。

このように考えていくと、「あさみどり」と「ふかみどり」との対立は、型通りに見事な歌を披露して万座を感動させた話か、意表を衝く表現で予想を越えた歌を披露して期待に十二分に応えた話か、という違いになってくる。これはもはや、和歌表現の約束事という枠の中では解決し得ない問題である。また、いずれかが正しく、いずれかは誤り、といった問題でもない。どちらも表現としては正しいのであり、その表現に即した理解が求めているということなのである。

それにしても、歌の初句が「ふかみどり」とあることで、聞き手には、引掛かりのようなものが意識されることである。そしてそのことが、歌の初句を「ふかみどり」としたことの、ひとつの意義である、ともいえるのではないか。「あ

さみどり」であれば、聞き手は、この歌を春の歌として何の疑いもなく受け入れるであろう。しかし、それが「ふかみどり」であることで、そこに一種の違和感が生じる。聞き手は、そこから、この歌の意味を再度捉え直すという作業を始めるのである。この作業によって、初句を「ふかみどり」としたことの意味が汲み取られ、和歌表現の常識を外した効果が發揮されるのである。

先に、『大鏡』や『古今著聞集』、『十訓抄』所収の別出作品では、歌の初句が「ふかみどり」になっていることを示した。このことは、それらが参照した『大和物語』が、六条家本系統であった可能性を示唆するが、それ以上に、「ふかみどり」の本文で歌が伝えられた事実を重くみたい。『大鏡』以下の作者や編者が、二条家本系統に「あさみどり」という異文があることを認識していたかどうかは定かでない。しかし、少なくとも「ふかみどりかひある春にあふときは」と表現した歌が、平安後期から鎌倉にかけて違和感なく受け入れられており、また、「あさみどり」と表現することは異なる意味合いが存在することについても、十分に理解していた可能性があるとはいえるのである。

おわりに

『大和物語』一四六段の「あさみどり」の歌には本文の異同が存在し、一部の伝本では、歌の初句が「あさみどり」ではなく「ふかみどり」になっている。しかし、現行の注釈書類はもっぱら「あさみどり」とする本文を採用しており、従来はこの異同に注目することはほとんどなかった。両者の和歌での詠まれ方を分析すると、「あさみどり」が春の歌としては順当である一方、「ふかみどり」も春の歌として不都合とはいえず、加えて、別の含意を読み取ることが出来ることがわかる。この含意は、この歌が、宇多帝が召し上げたうかれめによって、その御前において詠まれたものであるという、「場」を意識したものとして捉えることで、理解が可能になる。つまり、うかれめは、歌を献上する相手が帝であり、それが詠み上げによって享受されることの意味を十分に理解していたため、よりその「場」にふさわしいものを選んだということである。この場合、うかれめは、宇多帝の期待に応えただけではなく、それ以上の歌を詠み上げたことになるだろう。

このような本文異同は、『大和物語』に限らず、しばしば発生する問題である。その異同を、優劣という観点から取捨す

ることが、従来の研究では一般的であった。しかし、中には優劣の判断だけでは片づけられない異文も存在する。本稿で取り上げたのは、まさにそのような優劣を越えた異同だと考えられるのである。そうした異文については、性急に結論を求めるのではなく、異文そのものの読みの可能性について十分に検討することが肝要であろう。『大和物語』については、数ある注釈書の底本が二条家本系統に偏っている現状がまず、打破される必要があると考える。それは、決して六条家本系統の優位を説くものではなく、異同のひとつひとつから立ち現れる本文の揺れに向き合うことが、『大和物語』を読解する面白みを、格段に増やすことに繋がると考えられるからである。

(付記) 本論は、第六十二回西日本国語国文学会(二〇一二年九月十五日)で発表したものに改変を加えたものである。ご意見・ご指導をいただいた先生方には、この場を借りてお礼を申し上げます。

(こまつ あすか・本学大学院博士後期課程)